

佛蘭西書巡覧 15

平山 弓月

地理学、天文学、動植物学、地質学などの自然諸科学と文学を巧みに融合させるヴェルヌの才能を読みとったエッツェルは原稿を手直しさせたうえで『気球に乗って五週間』を出版しさらに、準備中の雑誌の寄稿者としてヴェルヌと執筆契約を結びます。科学小説家ヴェルヌの誕生です。

杉本淑彦



皆さんのなかの多くの方が、子供の頃に、ネモ船長の潜航艇の物語(『海底二万里』)や、巨大な大砲で月面に砲弾を打ち込む計画の物語(『地球から月へ』『月をまわって』)などの物語を、少年少女向けの読物で胸をときめかせて読まれたと思います。まだ潜水艦もロケットも発明されていなかった、19世紀の半ばに、卓越した想像力で近未来的な物語を綴った人がフランスにいたのです。

今回は、イギリス人H.G.ウェルズとともにS.F.小説の開祖と称される、それらの作者ジュール・ヴェルヌ *Jules Verne (1828-1905)* を取り上げましょう。

西フランス、ロワール河畔の町ナントで生まれたヴェルヌは、20歳を迎える年に、当時の地方出身の若者がたどる道として、パリに出て法律学校に通います。首都で作家のアレクサンドル・デュマや写真家のフェルックス・ナダルと知り合います。ナダルは自らが制作した気球に乗って、パリをカメラに収めたりしていました。ヴェルヌが、アフリカ内陸部を舞台とする『気球に乗って五週間』 *Cinq semaines en ballon, 1863* を書いたのは、もちろん彼が勉学の傍ら好んで読んでいた、地理学などの自然科学の論文から得た知識もありましたが、ナダルの気球が大きくかわっていたことでしょう。

日本では、早くも1878年(明治11年)に、*Le Tour du monde en quatre-vingts jours, 1873* を川島忠之助がフランス語原典から訳した『新説八十日間世界一周』(後編は1880年刊行。現在では『八十日間世界一周』の表題が一般的)が、ヴェルヌの最初の翻訳として出ました。また1896年には、*Deux ans de vacances, 1888* が英語からの翻訳ではありますが、森田思軒の手で『十五少年』(現在では一般に『十五少年漂流記』)として刊行されました。これらは明治期の翻訳文学としても、極めて重要なものであると言えます。現在でも、数多くの翻訳が世上に供され、

多くの読者を獲得しているのです。

それでは、ヴェルヌの代表的な作品でもあり、映画化もされた『八十日間世界一周』を少しくひもといてみましょう。

物語は、1872年のある日、イギリス人資産家フィリアス・フォッグが、ある場で、八十日間で世界を一周できるといい、それが賭けの対象になり早速フォッグは従者パスパルトゥー(フランス語で「万能のもの」の謂い)を従えて旅に出、見事世界一周を八十日間でやり遂げ、賭けで勝ちを納めるといふのです。

彼が利用する移動手段は、当時開発されたばかりの鉄道や蒸気汽船が中心となるのですが、予期せぬ出来事から象や帆の付いた櫂といった「乗り物」まで利用することとなります。

世界一周という主題に、フォッグを銀行強盗犯と思ひこみ、彼のあとを追う刑事が絡み、インドでは宗教的理由で殉死を迫られていた女性を救出し(最終的にフォッグはこの女性と結婚することとなります)、彼女を一周旅行に同行するなどというお話が、物語を重層的に仕上げ、読者を飽きさせません。さらに通過する土地のさまざまな姿や、そこに暮らす人々の特性をヴェルヌは描きます。また、香港で主人たちとはぐれた従者パスパルトゥーは、たどり着いた横浜でアメリカの曲技団で働く羽目になるなど、ヨーロッパの人々にはまだ「珍奇」な日本をさりげなく物語に描きこんでいます。地理学的な知識を十分に生かしたヴェルヌの物語は、決して荒唐無稽なものではありませんでした。

ヴェルヌの作品は、長く「子供向け読物」といった、一段低い位置に置かれていましたが、現在は見直されてきています。私たちに豊かな読書体験を与えてくれるものだと断言してもいいでしょう。

ひらやま ゆづき(教授・フランス語・フランス文化論)